V

高校と大学の連携や接続のあり方

大学入試制度の改革については大枠で賛成

国で議論している入試制度改革の柱である「共通入試を基礎とした上で各大学が多面的な評価を加えて実施する入学者選抜」に対しては高校・大学ともに賛成が6割以上に達し、制度改革案の大枠についての賛意が示された（図5-11）。ただし「現在のセンター試験の廃止」は高校側で賛成２割、反対４割と反対が多い。同様に「基礎レベル・発展レベルの２種類の『達成度テスト』導入」は、高校側の反対が高かった。多くの高校ではセンター入試対策が学力向上策として定着してきた背景があるのかもしれない。「『達成度テスト（基礎レベル）』の推薦・AO入試への活用」では、高・大ともに賛意が高く、推薦・AO入試における学力担保措置としての期待が高い。達成度テストの複数回受験は特に大学で賛成４割・反対２割、高校では賛成３割、反対４割と高大の認識が分かれた。今後、高校現場の懸念を踏まえた丁寧な説明を行う必要があろう。

高校生と大学をつなぐ新たな仕組みや入学後の選択

高校教育多様化、高等教育人口拡大の必然として、大学進学者の多様化が進んだ。こうした中では、入試制度改革のみならず、高校教育・大学教育における様々な改革も高大接続の課題である。その一つが高校教育で一部大学レベルの教育を行い、それを大学の単位として認定するアドバンストプレースメント（AP）である。調査結果では、「やる気のある高校生に、大学の授業を受けられるようにしたほうがよい」との比率が高校で７割、大学で６割台の賛意を集めている（図5-6）。この結果を見ると、意欲・能力ともに秀でた高校生と大学をつなぐ仕組みが課題として認識されつつあり、AP導入を議論する土壌はできつつあるようだ。しかし現状では、大学から高校への出張授業は９割以上が実施しているものの「大学での通常授業を高校生が履修・聴講できる制度」を持ち、入学後の単位として付与している大学は15％に過ぎない（図5-1）。我が国なりのAPの仕組みをどう創出するか実効性のある政策・実践が待たれる。

一方指摘されているのが、大学で学ぶ意識の曖昧な学生の入学と入学後の不適応・退学危機である。この現実にどう対処するか。調査では、学内での転部や、他大学への編入・転学に対して高大ともに半数前後の賛意が得られた（図5-6）。また、高校の７割、大学の６割と、ともに高い賛意を得たのが「入学の段階では細かく専門に分けず、大学入学後に専門を選べるようにしたほうがよい」との方向性である。今日の大学生の学力・学習意欲の実状を踏まえ、大学生を「主体的な学習者へと導く方策」としてレイトスペシャリゼーションの必要性が増している。

高校教員と大学教員の交流拡大が求められている

「高校教員と大学教員の交流の機会を増やしたほうがよい」との高大の交流拡大に対して高校の８割以上、大学の７割以上と高い比率で賛意が得られた（図5-6）。大学の５割、高校の４割５分は「高校教員と大学教職員の意見交換」を行っており交流の機会はそれなりに確保されている（図5-3、図5-4）。しかし大学側が高校の「学習内容や履修状況を知る取り組み」はわずか１割であり、高校が「大学の学習や研究の内容を知る取り組み」は３割弱である。大学側が高校に対して自学を紹介する機会はあっても、高校生の学びの実状を知り自校の教育に活かす取り組みには乏しいのではないか。この状況をどう乗り越えて大学教育の充実につなげるか。また高校側も（第Ⅱ章でみたとおり）半数が「現状の大学からの情報は分かりづらい」と考えていることから、大学との交流・対話を今以上に深めることで、形式的な大学情報の提供を越えて、進路・学習指導をより充実させたい思いがあるのかもしれない。いずれにしても、大学と高校が連携し教育を充実する糸口として相互交流の拡大が求められている。

（ベネッセ教育総合研究所　主任研究員　樋口　健）

5-1. 高大連携活動の実施状況

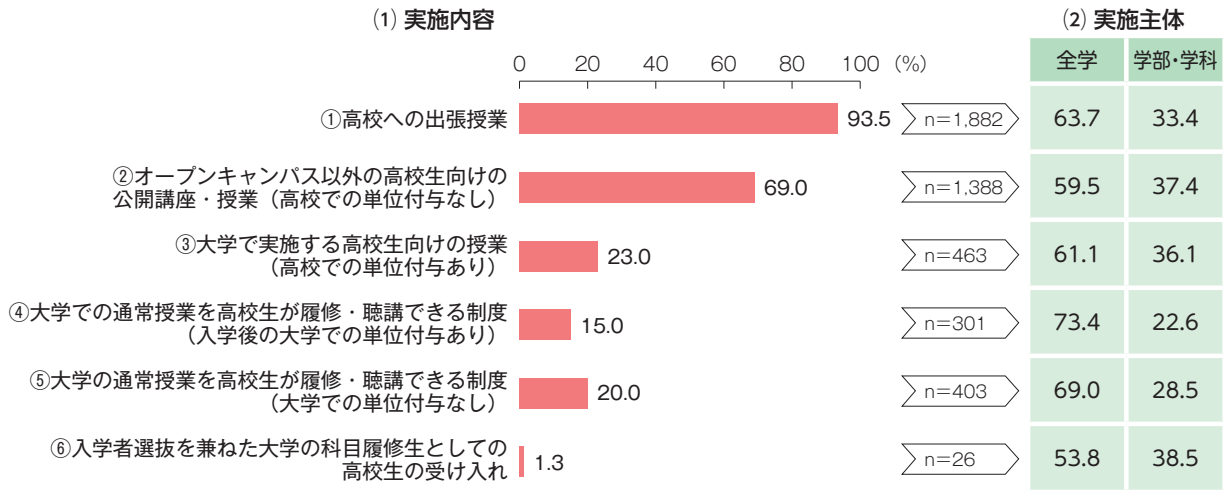
高校生の大学の通常授業の履修・聴講が入学後に大学の単位となる制度を15%が実施。

高大連携活動としてたずねた項目のうち、多く実施されているのは「高校への出張授業」93.5%、次いで「オープンキャンパス以外の高校生向けの公開講座・授業（高校での単位付与なし）」69.0%である。実施主体はいずれも「全学」が多く、それぞれ63.7%、59.5%と半数を超えている（図５－１）。次に、「高校生向けの講座・授業」と、「大学での通常授業の履修・聴講」に分けて、設置者・学科系統別にみたのが、図５－２である。高校生向けの講座・授業は設置者別の実施率にあまり違いはなく、学科系統別では単位付与の有無にかかわらず相対的に「理工」が高い。大学での通常授業の履修・聴講に対して入学後に単位を与える制度は、全体では15.0%が実施しており、私立では18.5%であった。

Q

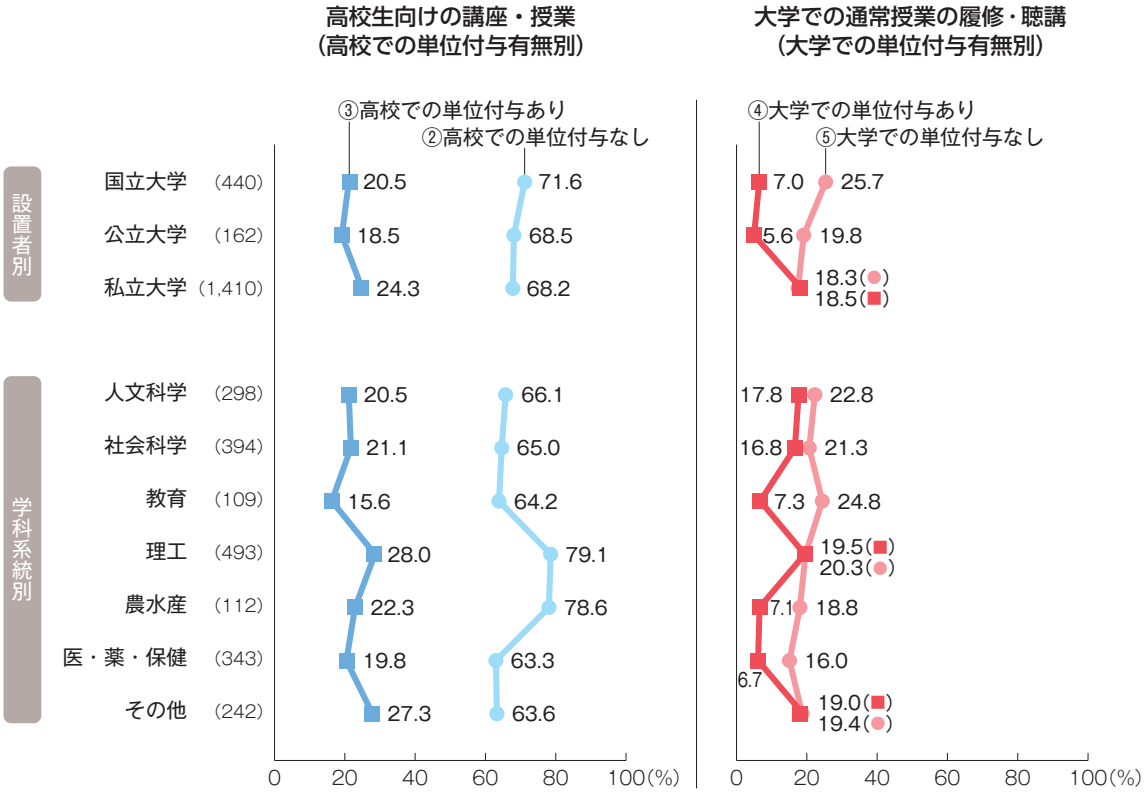
次に掲げる高大連携活動のうち、
（１）貴学科（学部）で実施しているもの、または全学で実施している活動に学科として参加しているものすべてにチェックをつけてください。
（２）選んだものについて、実施主体は全学、学部・学科主体のどちらですか。

図５－１　高大連携活動の実施内容と実施主体（全体）　大学



注）〉は「(2)実施主体」の質問の対象人数を表す。

図５－２　高大連携活動の実施率－高校生向け講座・授業/大学の授業の履修・聴講別（設置者別・学科系統別）　大学



注）②③④⑤の番号は、図５－１の項目に対応している。

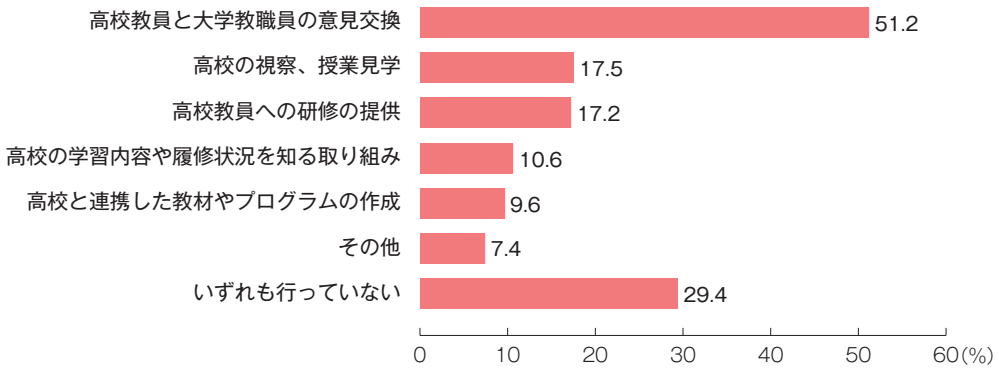
5-2. 高校と大学の交流

半数の大学（学科）が、高校教員との意見交換を行っている。

高校と大学の交流の状況を高校と大学それぞれにたずねた。大学の回答をみると、「高校教員と大学教職員の意見交換」は51.2%が実施しているが、「高校の学習内容や履修状況を知る取り組み」は10.6%にとどまる。また、3割は「いずれも行っていない」と回答している。一方、高校は、「高校教員による大学の見学」を58.4%が実施、「高校教員と大学教職員の意見交換」を44.2%が実施している。

Q 貴学科では、高大接続に関連して、次のようなことを行っていますか。

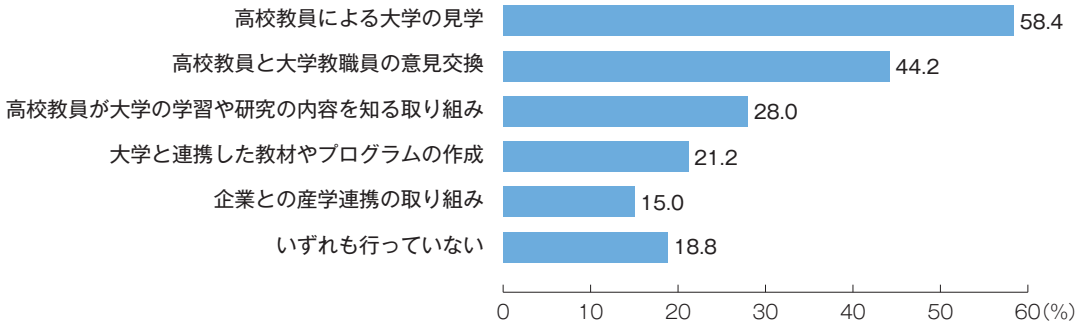
図5－3　高大接続に関する取り組み（全体）大学



注1）複数回答。
注2）対象は、回答者全体2,012件。

Q 貴校では、進路指導や高大接続に関連して、次のようなことを行っていますか。

図5－4　高大接続に関する取り組み（全体）高校



注1）複数回答。
注2）対象は、回答者全体1,228件。

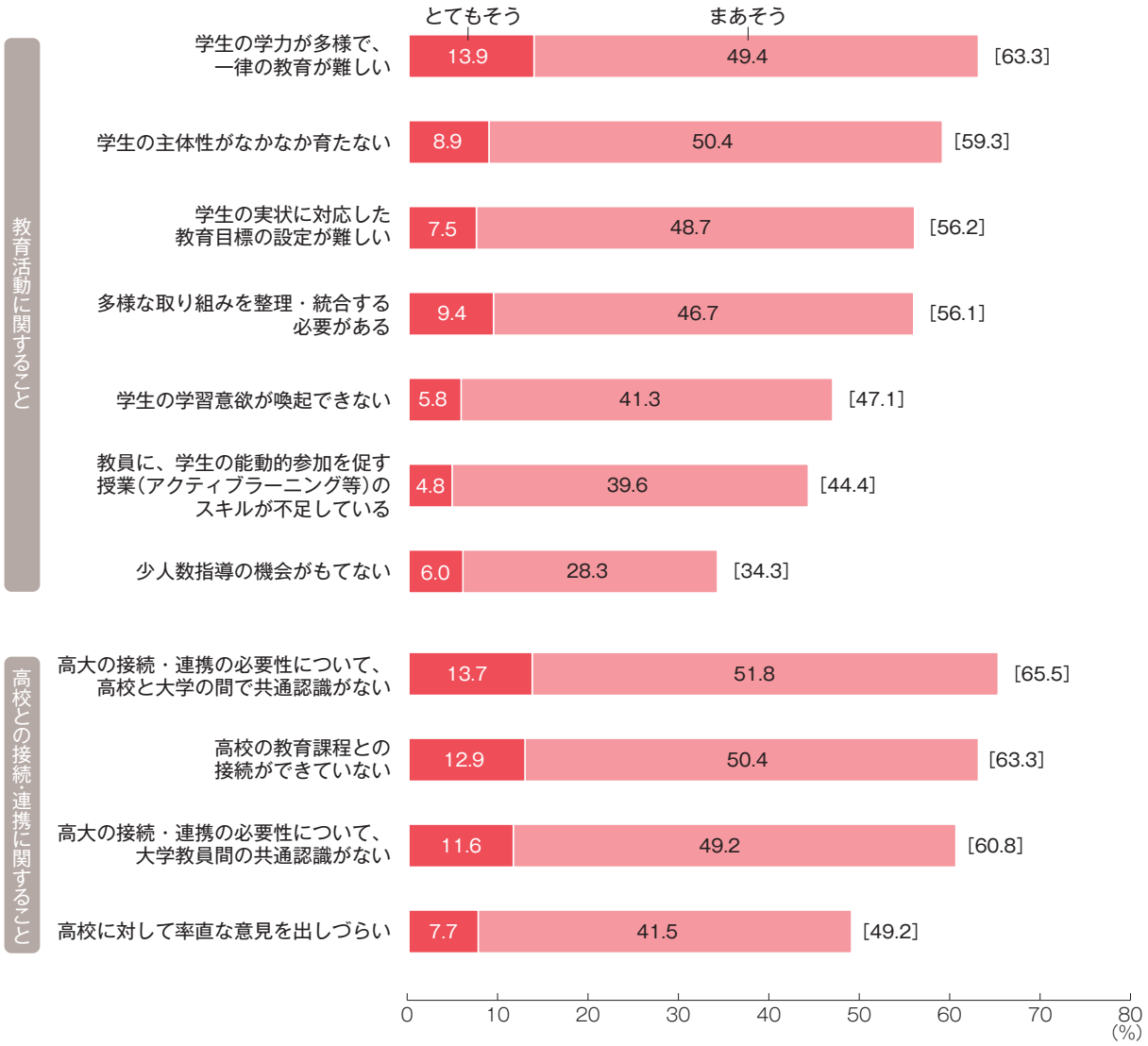
5-3. 高大接続の取り組みに関する課題

6割強の学科で「高大の接続・連携の必要性について、高校と大学の間で共通認識がない」と感じている。

高校と大学の接続・連携に関する課題についてたずねたところ、教育活動に関しては、「学生の学力が多様で、一律の教育が難しい」に「そう」(「とてもそう」＋「まあそう」、以下同)と回答した割合が63.3%、次いで「学生の主体性がなかなか育たない」が59.3%と高い。高校との接続・連携に関しては、「高大の接続・連携の必要性について、高校と大学の間で共通認識がない」が65.5%、次いで「高校の教育課程との接続ができていない」63.3%と高くなっている。

Q 貴学科における高大接続の活動全般について、次のようなことはあてはまりますか。

図５－５　高大接続の取り組みに関する課題認識(全体)　大学



5-4. 高校と大学の接続に関する今後のあり方

大学入学後に専門を選ぶなどの進路変更の柔軟化については高校で支持が高い。

高校と大学の接続に関する今後のあり方についてたずねた図５－６の項目のうち、もっとも多かったのは「高校教員と大学教員の交流の機会を増やしたほうがよい」大学74.7%、高校84.5%(「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%、以下同)、次いで「大学での進級や卒業の認定基準をもっと厳しくしたほうがよい」大学72.2%、高校79.6%であった。また、入学後に選択の自由度を高める方策としての「学内での学生の転部をもっとしやすくしたほうがよい」「他大学への編入・転学をもっとしやすくしたほうがよい」「入試の段階では細かく専門に分けず、大学入学後に専門を選べるようにしたほうがよい」(以下、募集単位の大くくり化)はいずれも高校の方が10ポイント以上高くなっており、高校でよりその必要性を感じているようだ。さらに、募集単位の大くくり化について、属性別にみると、学科系統では「社会科学」で支持が７割と高く、高校では普通科で支持が高い(図５－７)。

Q 高校と大学の接続に関する今後のあり方に関して、あなたはどのように思いますか。

図５－６　高校と大学の接続に関する今後のあり方(全体)　高校　大学

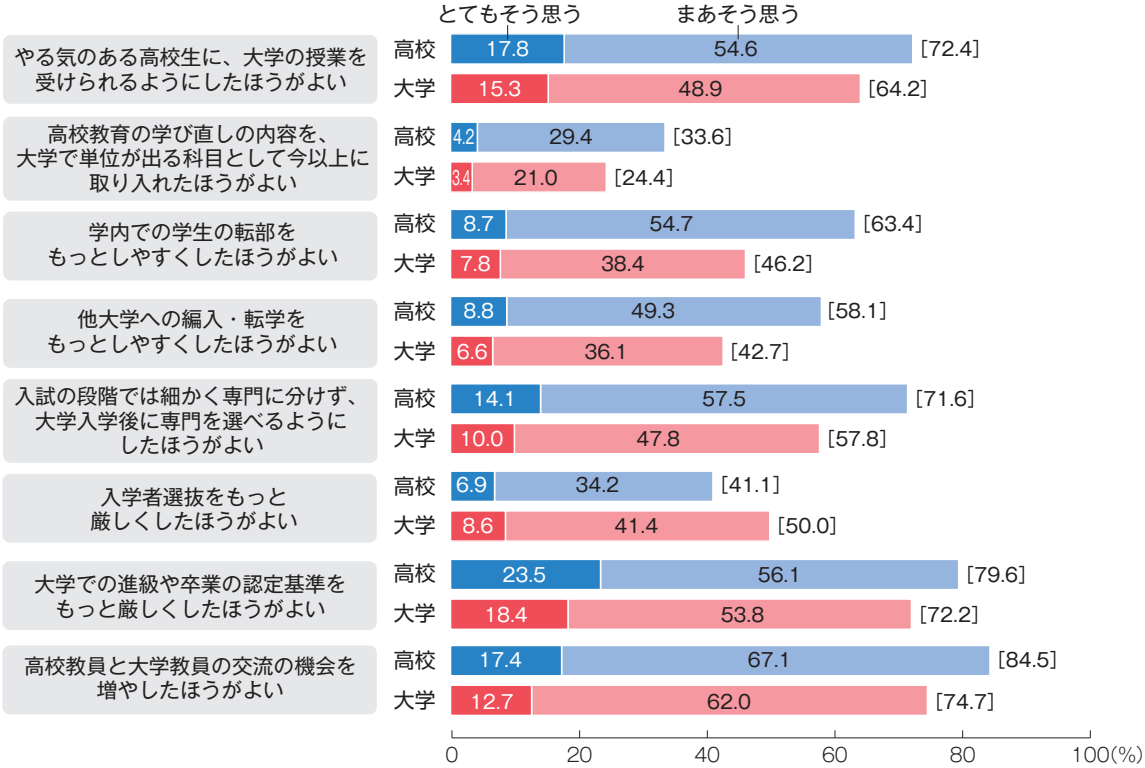
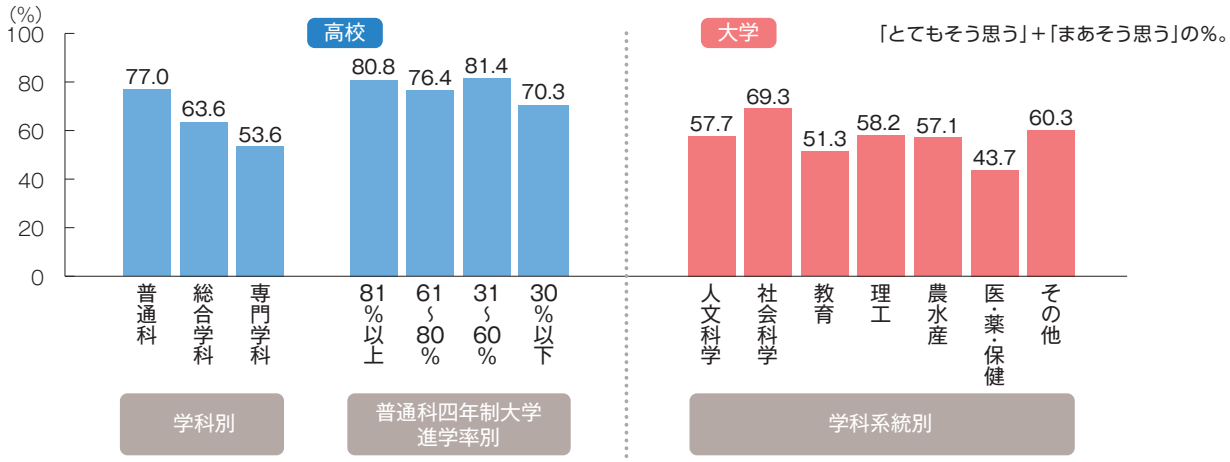


図５－７　募集単位の大くくり化(学科別・普通科四年制大学進学率別、学科系統別)　高校　大学

「入試の段階では細かく専門に分けず、大学入学後に専門を選べるようにしたほうがよい」



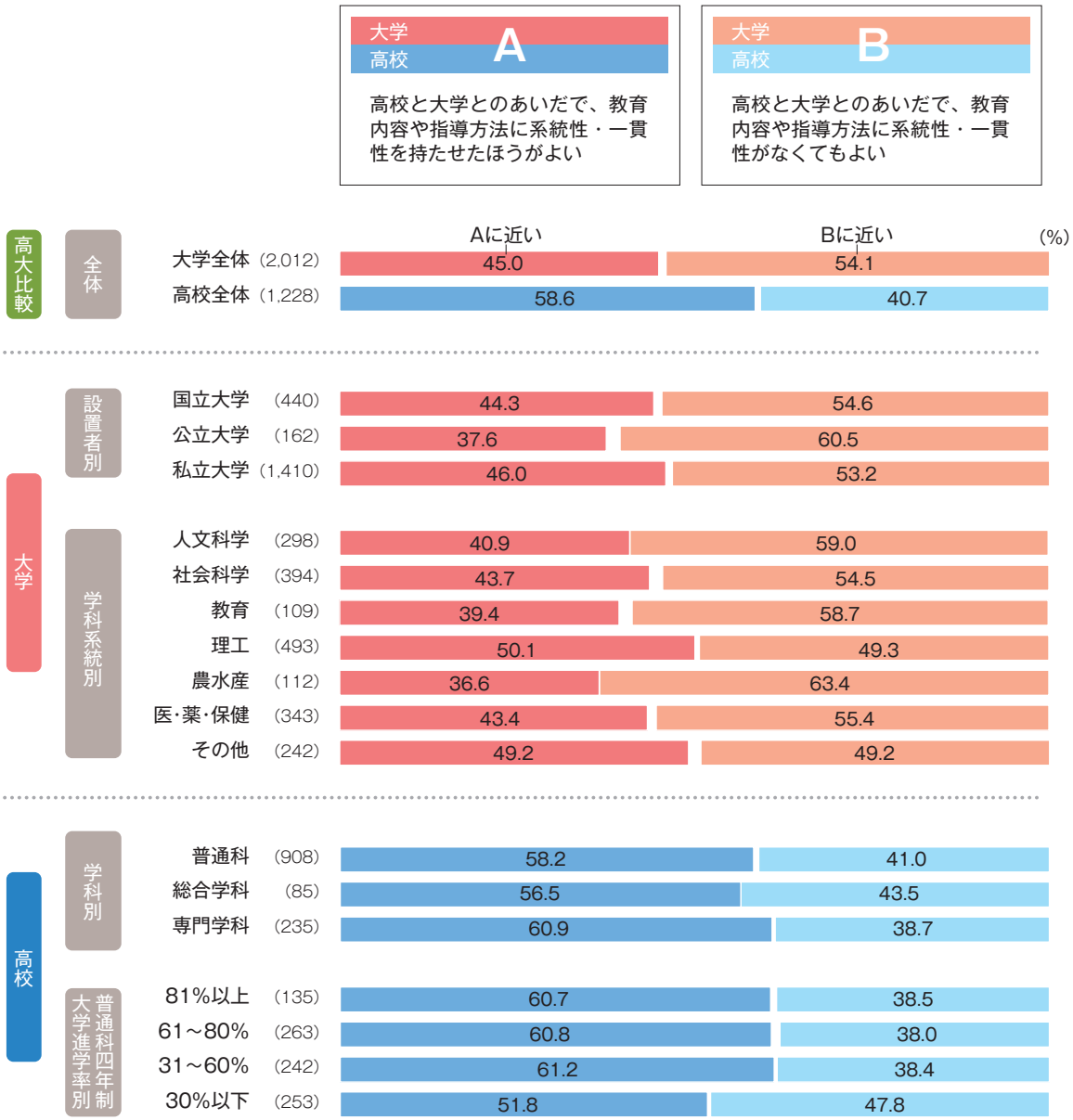
5-5. 高校・大学間の教育内容・方法の一貫性について

教育内容・指導方法に系統性・一貫性を持たせたほうがよいと考える割合は高校で高い。

高校・大学間の系統性・一貫性について、「A：教育内容や指導方法に系統性・一貫性を持たせたほうがよい」のか「B：教育内容や指導方法に系統性・一貫性がなくてもよい」のかについて、大学は「B：一貫性がなくてもよい」がやや高く、高校は6：4で「A：一貫性を持たせたほうがよい」の方が高かった。大学は設置者による大きな差はみられず、学科系統別には「理工」で「A：系統性・一貫性を持たせたほうがよい」が50.1%と半数に達している。一方、高校は学科別の違いはあまりみられないが、普通科の四年制大学進学率別では「30%以下」で「B：系統性・一貫性がなくてもよい」が約5割に増える。

Q あなたの意見はAとBのどちらに近いですか。

図5－8　教育内容や指導方法の系統性・一貫性に対する考え（全体・属性別）　高校　大学



注）「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。

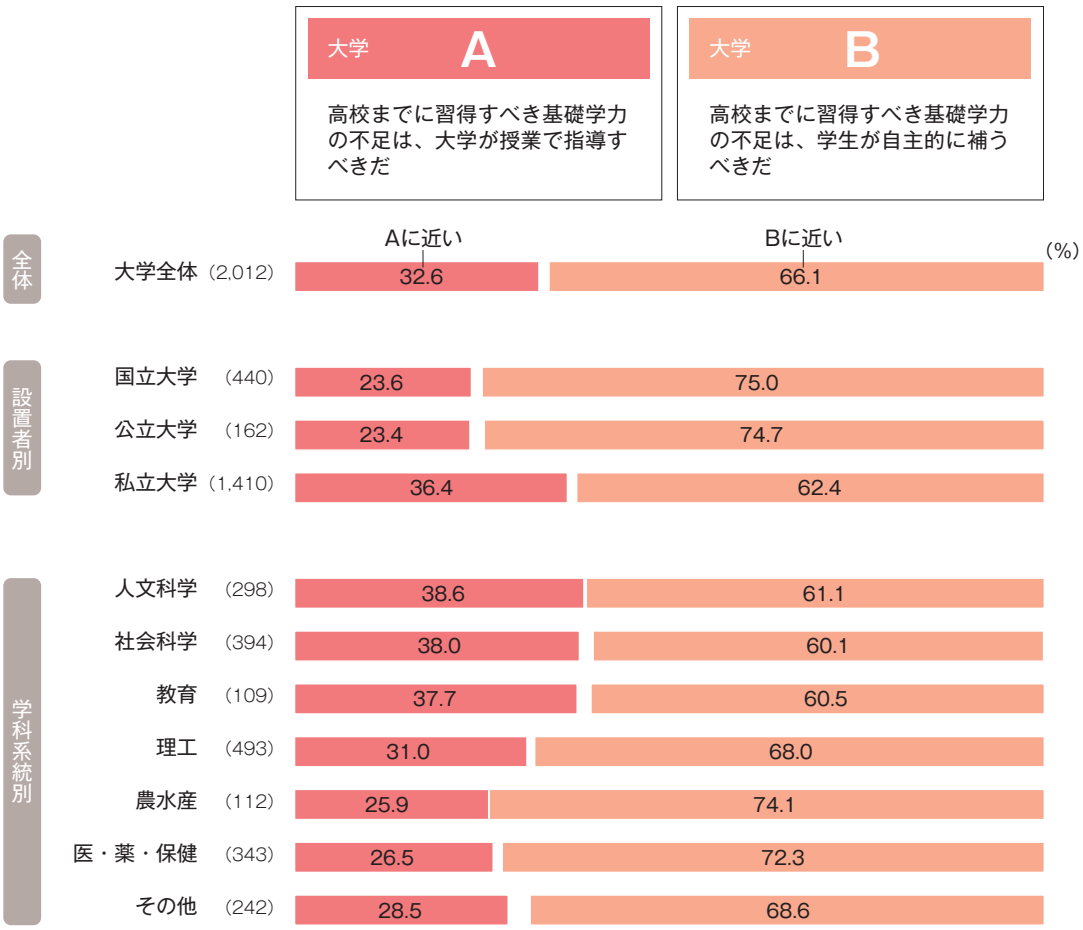
5-6. 基礎学力不足に対する大学での指導について

高校までの基礎学力の不足を大学の授業で指導すべきと考えているのは約３割。

高校までに習得すべき基礎学力の不足について、「A：大学が授業で指導すべき」なのか、「B：学生が自主的に補うべき」なのか、大学に対して意識をたずねた。結果は、「B：学生が自主的に補うべき」が66.1%、「A：大学が授業で指導すべき」が32.6%であった。これを属性別にみると、国公立大学では、「B：学生が自主的に補うべき」が７割台半ばに増える。学科系統別には理系の学科で「B：学生が自主的に補うべき」が多い。

Q あなたの意見はAとBのどちらに近いですか。

図５－９　基礎学力の不足に対する考え（全体・設置者別・学科系統別）　大学



注）「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。

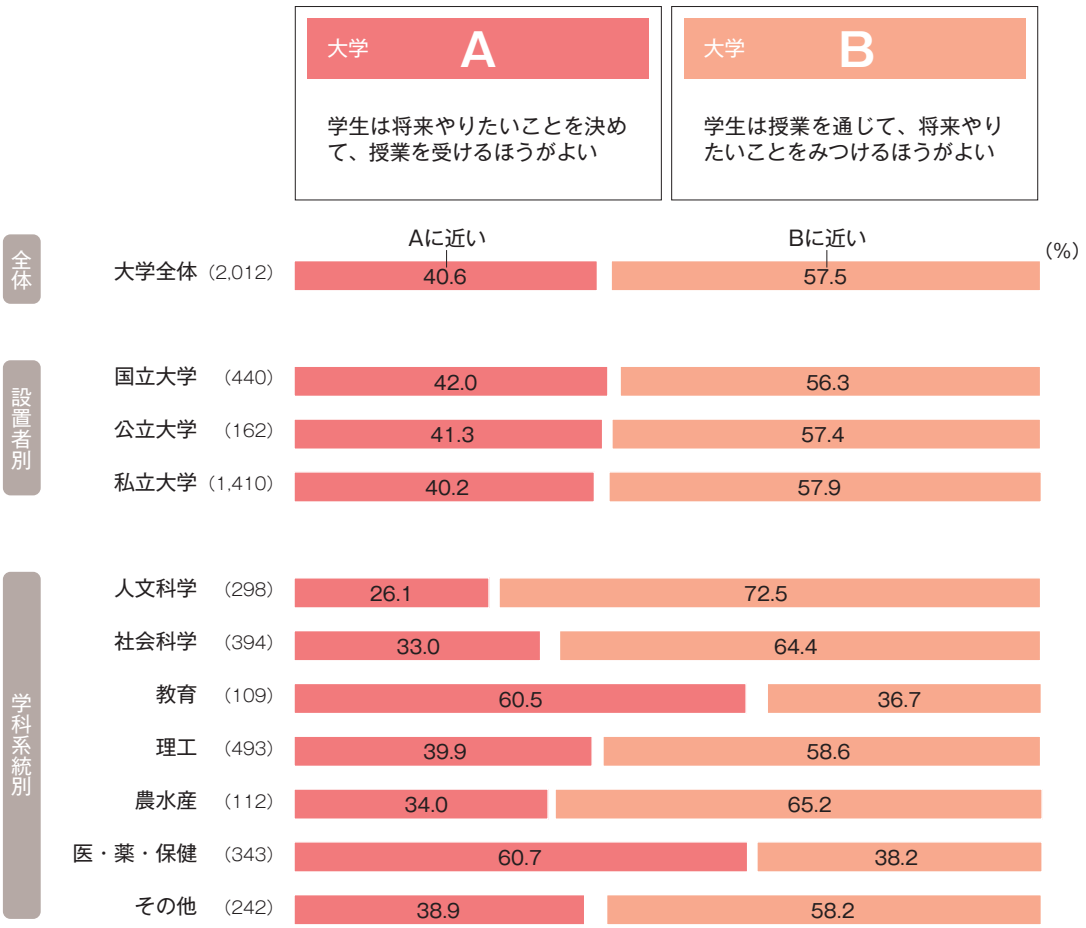
5-7. 大学での学びと将来展望について

学生は授業を通じて将来やりたいことをみつけるほうがよいと考える割合が６割。

学生は「A：将来やりたいことを決めて、授業を受けるほうがよい」のか「B：授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい」のかについて大学にたずねた。全体としては、「B：授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい」が57.5%で多い。しかしながら、属性別では、「教育」「医・薬・保健」といった専門職業人を育成する学科系統は「A：将来やりたいことを決めて、授業を受けるほうがよい」が高いが、それ以外の学科系統では「B：授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい」がおよそ６割以上である。特に「人文科学」では72.5%と高い。

Q あなたの意見はAとBのどちらに近いですか。

図５－10　大学での学びと将来展望の有無に対する考え（全体・設置者別・学科系統別）大学



注）「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。

5-8. 大学入試や高校・大学の改革に対する賛否

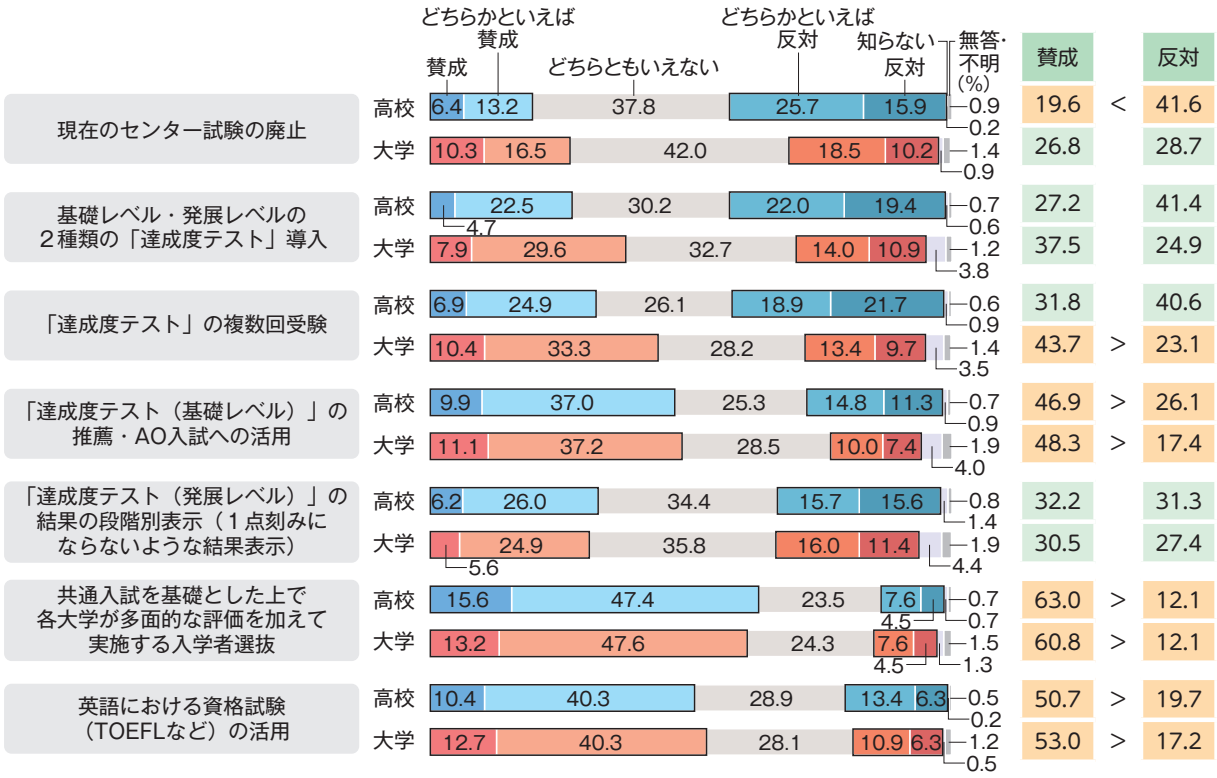
入試改革の方向性には賛成が多いが、「2種類のテストの導入」や「複数回受験」については高校で反対の方が多い。

現在の大学入試改革、高校や大学の改革についての賛否をたずねた。「共通入試を基礎とした上で各大学が多面的な評価を加えて実施する入学者選抜」は高校・大学ともに賛成(「賛成」＋「どちらかといえば賛成」)が6割であった。しかしながら、「現在のセンター試験の廃止」や「基礎レベル・発展レベルの2種類の『達成度テスト』導入」「『達成度テスト』の複数回受験」については、高校で反対(「反対」＋「どちらかといえば反対」)が4割と、賛成より多くなっている。また、「大学の機能別分化の促進」は賛成が高校45.7%、大学38.7%と、反対より多くなっている。

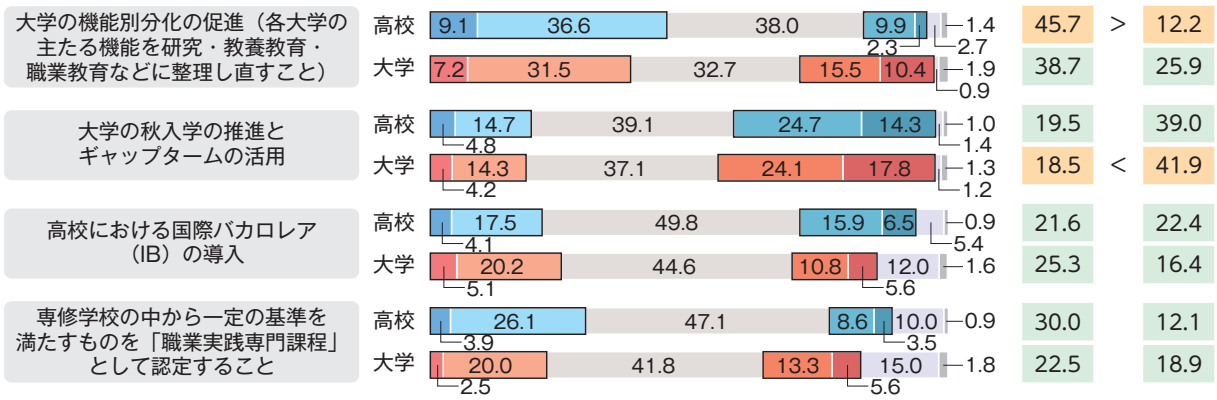
Q あなたは、現在の改革で検討されている次のような取り組みについて、賛成ですか反対ですか。

図5－11　大学入試改革・高校や大学の改革についての賛否(全体)　高校　大学

【「達成度テスト」や大学入試について】



【高校・大学の改革について】



注1）右表の「賛成」は、「賛成」+「どちらかといえば賛成」の%、「反対」は、「反対」+「どちらかといえば反対」の%を表す。
注2）右表の「>」「<」と■は、「賛成」と「反対」で20ポイント以上の差があることを表す。